

桂林は観光地以外の何ものでもない

五月十八日（火）午後一〇時前。桂林（クエイリン）海外賓館にて。今、部屋の温度計は二四度を示している。衡陽では雨が降り続いたこともあって肌寒い感じだったけれども、ここでは上着も必要がないほどだ。天候は決して良くはなくて、時おり雨が降ったけれども、南国のスコールのようにすぐに止んでしまった。

桂林は北緯約二五度、台湾の台北市に等しい。かなりの南国にきているのだと僕は思う。

広西壮（チワン）族自治区東南部に位置する地方都市といえば僕たちにはなじみが薄いんだけど、もちろんこの桂林は山水画の故郷としてTVコマーシャルなどで必ず一度は目にしたことがあると行ってみたいほどの場所なのだ。また香港や広東省の広州からの交通の便も整備されて、中国で一、二を争う観光地になっている。

「桂林の山水は天下に甲たり」

しかしながら、例えば僕の旅が一個の〈寂しさ〉として、何ものにも裏づけられてはいないただの僕として、ボウフラのように漂っていくことなのだとしたら、有名観光地としての桂林へ行くことにはそれ自体としてはそんなに意味はない。それは「目的」にはなりえないし、むしろ観光地としての装飾性や観光というシステムに接することはある種のいとしさを僕に感じさせる。だがまた一方で、意味がないということをごささらに強調すること、そのことにもまた意味はない。

行くこと。ただ行くこと、ひたすら行くこと。できうる限り、つねに行くこと。

そして僕は中国政府の外貨収入源としての観光システムにすっぽりと収まっている自分を発見する。

ここ桂林では、僕は外国人観光客以外の何者でもないのだった。雨に濡れそぼった衡陽から、観光地桂林へ。湖南省から広西壮族自治区へ。地理が変わり、風土が変わる。僕は上着を脱いで、衡陽での思考から自由になったような感じがする。なにか少しがらんとした僕が、小さいけれども外国人向けに洗練されたホテルの一室にいた。かりそめの宿として観光システムに身を乗せるのも悪くはないかもしれない、と僕は思う。

※

衡陽から桂林までは、約七時間の列車の旅だった。

座席は車両のいちばん端で、浙江省からの農協(?)の観光団と一緒にいた。観光団特有の浮き立った気分が車両には充満し、賑やかな中国語があたりをはばかることもなく飛び交っていた。

目の前はちよつとインテリ風の団長さん。隣はやんちゃな若衆頭という感じの青年。インテリ風の団長さんはひとしきり指示を出したあとはまわりの騒ぎを気にする風もなく、雑誌を一心に読んでいた。若衆頭はみんなを盛り上げようとして座席から座席へと飛びまわっていた。

昼近くなり、観光団には弁当が配られて、インテリ風の団長さんは読んでいた雑誌をテーブルに伏せて、弁当が皆に行き渡るように指示し、それを見届けたあとは弁当をつつきながら再び雑誌に目を落した。

弁当を食べながらビールをラップ飲み(それが普通なのだ)し、あるいはコップ酒を飲む団員たち。僕にはそのルールが分からないトランプゲームに夢中になって、時おり大きな声を上げる若い団員のグループ。

インテリ風の団長は騒ぎから離れてひとり雑誌を読みつづけ、弁当を食べおえると、列車の窓を開けて無造作に弁当殻を投げ捨てた。

僕は少しショックを受ける。誰もが窓から弁当殻を投げ捨てるのだ。インテリ風とか、団長さんとか、群れの騒ぎを離れてひとり雑誌を読んでいる、とかいうことは関係がないのだ。

僕は弁当売りから買って食べおえた弁当殻を隠すようにして座席の下に捨てた。

(小さなテーブルに弁当殻はじゃまなものだけれども、捨てる場所がないのだ。また、僕は窓から捨てることができなくて、座席の下に捨てただけけれども、実は同じことなのだ。時おり服務員が座席の下や廊下を掃き出していくのだけれども、掃き集めたゴミを車外へ捨てるのを目撃したことがある。ひとりひとりが捨てるのか、誰かが集めてから捨てるのかという違いがあるだけなのだ。)

ふとしたきっかけで、筆談が始まる。

列車の揺れを気にしながら、どこから来たのかとか、仕事は何をしているのかとかやり取りを始めると、やがて日本人がいるということでもちよつとした騒ぎになり、団員の中の日本通が座席にやって来た。

彼はつたない文字で、

『あ、い、う、え、お』
と書いて、

「あ、い、う、え、お」

と発音する。お世辞にも上手な発音ではなかったけれども。

若衆頭の青年は、興味深そうに筆談を覗き込んでいた団員たちを代表するように、

「我們朋友！」

と叫んだ。

インテリ風の団長は物静かに、桂林ではどこに泊まるのかと尋ねた。まだ決まっていないことを伝えると、我々と一緒についてこい、と言う。

僕は少し列車に酔っていた。揺れるテーブルで筆談の文字を見つづけたことが原因だった。少し気分が悪くて、賑やかな観光団とずっと一緒にいるのはおっくうに感じたので、あいまいに返事をした。

(これはある意味では中国人が弁当殻を窓から投げ捨てるのと同じ、社会性のない日本人の悪いくせなのだ。)

途中駅に停車するたびに、何人かの乗客が降り、何人かの乗客が車両に乗り込んでくる。

そのたびに浙江省観光団は陣取り合戦に身構え、勝利し、次第にその領土を拡張していった。それはつまりこういうことだ。

列車の硬座に始発駅から乗るときは座席の指定を受けるのだが、途中下車した乗客の座席は空席つまり自由席になる。途中乗車の客は座席指定がないので、途中下車した乗客の席を見つけるしかない。さて、この取決めに従ってわが浙江省観光団がどのように陣取り合戦を展開したかという、彼らはいち早く下車した乗客の席を占め、空いた分の座席には足を投げ出し、あるいは二人、三人分の座席に横になって、占領してしまうのだ。途中乗車の乗客が声をかけるたびに団員は、

「満(マン)！」

ときっぱりと宣言する。気の弱い乗客ならばそのまま引き下がって他の車両へ行くのだが、ときおりはそうではない乗客も現れて、

「それではこの座席の者はどこにいるのか」

とあくまでも追及しようとする。そんなとき先頭に立っていきかいの場に馳せ参じるのは若衆頭で、トイレに行っているとか、お茶を入れに行っているとか理屈を立てる一方で、断固として異分子を実力で排除するという様子なのだ。

どうやら彼らの頭の中では、空席は自由席ということではなくて、一度手に入れた座席は観光団の空間ということになっているらしくて、途中乗車の乗客は異分子として感じられ、我々の空間への侵入、あるいは侵害として感じられるようだった。

観光団の旅行としてその心情は理解できなくもなかったけれども、や

がて桂林が近づいて、立ちんぼうの乗客もちらほら現れるような状態になってくると、陣取り合戦というような冗談ではすまされなくなる。

気の強い女性客が、向かいの空席に投げ出した觀光団員の足を払って、中央突破をはかった。異分子の突然の侵入に緊張した団員たちの空気を引き破るようにして、憤然と彼女は座席に腰を下ろした。

事態を察知した若衆頭とインテリ団長は緊急事態発生とばかりに猛然と侵入者に向けて突進した。

「ここは俺の席だ！」

若衆頭は大声を出して相手を威嚇する。

「じゃあ、あなたの座っていた席は誰の席なの？」

若い女も負けてはいない。しかし、理屈としては女の方が正しいのだけれども、いかんせん多勢に無勢。結局は若衆頭が座席を奪い取り、それでも女は、このまま他の車両に移ったら完全に負けを認めたことになる。でもいうように若衆頭の横に立ち続け、憤然としてにらみつけるのだった。

やがて列車は終点、桂林に到着した。先を争うようにして降車しようとする乗客たちの流れに押されるようにして、僕はふと車両の継ぎ目のところに大きな竹カゴを発見する。それは衡陽から南岳行きバスの天井に農夫が乗せていた竹カゴと同じものだった。直径は一メートルくらい、深さは二〇センチメートルくらいの平たい円筒型の竹カゴで、バスで見たときにもいったい何が入っているのだろうかと興味を引かれたのだけれども、ふと再び発見した竹カゴは半分ふたが開いて、強烈な臭いを放っていた。見ると卵だった。何十個とある卵の半数くらいはすでに孵化していて、まだ目も見えないようなひよこがピイピイと鳴き声を上げていた。頭のどこかに引つかかっていた疑問が解けてすっきりする一方で、いかにも中国らしい情景だと不思議に僕は納得していた。

乗客たちとともにプラットフォームに吐き出されて、僕は浙江省の觀光団とはぐれる。彼らと一緒にいたら面白い経験ができるかもしれないとも考えたのだけれども、やはりおっくうだった。彼らの方も突然の事態の発生に僕の存在など忘れているようだったし、それを幸いにして僕はつとめてゆつくりと歩いて意図的にはぐれたのだった。

ひとり桂林火車站の駅前広場に降り立った僕は、さっそく若い女性につかまった。

二〇才過ぎくらいの年格好の魅力的な女性で、僕は思わず立ち止まって機関銃のように連射される言葉に聞き入ってしまう。

もちろん中国語（北京語）なのだけれども僕はほとんど聞き取れない。おそらくこの地方の発音やなまりが混じっているのだろう。時おり言葉の語尾を「・・・ですよ」の「よ」のような強調の意味かもしれないが「・・・アン」と発音するのだ。アンという語尾の発音がなんとも可愛らしくて、僕はほとんど言葉を理解することはできなかったけれども、早くまた「・・・アン」が出てこないかと心待ちにしながら彼女の言葉に聞き入っていた。

ところで、彼女はホテルの紹介をしようとしているのだ。バッグからホテルの簡単な資料を出してきては、また機関銃のように言葉を連射する。彼女の紹介するホテルはどれもが一泊数百元もする高級ホテルで、僕は「もつと安いホテルでなければ泊まれないよ」と答えた。とは言っても僕は、

「便宜（ペニー、安い）、便宜」

と繰り返したただけだったけれども。

彼女はすこし思案し、

「一泊一〇〇元の海外賓館がオススメ！」

というように、また言葉を連射するのだった。

その熱意にほだされて、僕は彼女についていくことにする。頭の片隅に、案内料を別に取りられるのだろうかという思いがあったけれども。

海外賓館までは徒歩一〇分ほど。桂林市を縦走するメインストリート、中山路を少し歩いて脇道に入ったところにあり、小さいけれども新しいホテルだった。

彼女の導きでほとんど自動的にチェックインをすませた。二泊二〇〇元（FEC）。

ツインの部屋に落ち着くと、

「さあ、これからよ」

またもや彼女は言葉を連射するのだった。

分からないながらも筆談も交えて聞いていると、なんと彼女は僕の桂林観光を仕切ろうとしているのだ。

「一日目は桂林市内の見所をまわって、二日目は漓江（リージャン）下り。これでバッチリ！・・・アン！」

桂林では外国人の観光システムに乗ってみるのも悪くはないか、と思っていたので、基本的にはOKだったのだけれども、考えていた日程とは合わなかった。

「だけど、僕は明後日の午後三時発の列車で南寧へ出発するつもりだから、明後日に漓江下りをするのは無理だ」

それを聞いて、彼女は思案し、再び機関銃のように言葉を発する。

「一日日は漓江下り、二日目は市内の観光。ガイドさんに午後三時に列車に乗るということを言いなさい。これでバッチリ!・・・アン!」

話がまとまると、彼女はホテルの事務所に僕を連れていき、漓江下りと市内観光の手続きをさせた。漓江下りは二六〇元、市内観光は三〇元。(漓江下りは桂林観光のハイライトとも言っべきイベントでこのようにとても高い。もちろん外国人料金で、一般中国人は数十元。) ついでに明後日の南寧行きの列車の予約に五〇元。(以上すべてFEC。)

昨日、衡陽で両替したFECがほとんどなくなってしまった。あいにく海外賓館には銀行のカウンターはなかったので、彼女は近くの丹桂大酒店という大ホテルまで案内してくれた。

再びホテルの部屋に戻ってくると、彼女は

『早上八点』と筆談に使っていた手帳に書いて、

「明日は八時にロビーに出て、迎えを待っていなさい」と念を押した。

「これからしばらく休んで、晩ごはんを食べに街へ出ます。桂林にはいろいろな名物があります。・・・それから街へ出るときは、財布に注意すること・・・アン」

「謝々・・・アン!」

と僕は答えた。思いがけないように、笑いながら彼女は出ていった。

もしかしたら高い案内料を取られるのかもしれないと思っていたので、僕は拍子抜けする。それから、観光地だからバックマージンのようなシステムがあるのかもしれないと思っておした。

※

翌朝、午前八時にホテルのロビーで数組の中国人観光客らしき人たちとともに待っていると、しばらくして観光バスが到着した。ロビーで待っていた中国人たちがみんな乗り込んでいくので「たぶんこれでいいのだろう」と思って中国人たちのあとに続いて乗り込んだ。

発車を待っていると、乗客名簿を確認していたガイドの女の人が僕に向かつて何事かを告げながら、降りるようというしぐさをする。よくは分からないのだけれども、漓江下りに向かうバスではないようなのだった。

中国人の観光客たちを乗せたバスも出発してしまって、ひとりロビーに残された僕は少し心細い思いをしながら、迎えを待っていた。

しばらくして乗用車がホテルに到着し、サングラスをかけた若い女性

がひとリロビーで待っていた僕の方へ歩み寄り、書類を確認する。

サングラスの女性が運転する乗用車はそのあと二つのホテルをまわり、オーストラリア人の夫婦とドイツ人の男性を乗せて漓江の埠頭へと向かった。

漓江下りの観光船に乗り込むと、船内は細長いレストランのようになっていて、僕たち四人はひとつのテーブルを囲んで、用意されたお茶を飲みながら自己紹介。その間にも観光客は次々と船に乗り込んできた。乗客五〇人ほどのほとんどは白人で、観光船はそこだけが圧倒的に英語が飛び交う異空間となったのだった。

あいにくの曇り空で、しばらくすると雨が降り始めた。

降りしきる雨に叩かれた船室の窓越しに、漓江沿いの風景を見ていた。

漓江の岸边はこんもりとした深い緑が生い茂り、あるいはまばらに立ち並んだ木立の上空には灰色の雨雲が立ちこめていた。

人気のない岸边の情景に、木の葉のような舟が雨に打たれていた。

遠景には時おりカルスト地形特有の鋭角の山陰が姿を見せた。

それらは静かな朝の岸边の情景といったところで、僕にとってはそれでも十分に美しい情景だったけれども、実はこの漓江という川は九十九曲がりと呼ばれるほど曲がりくねった川で、観光船がカーブするたびに奇峰、奇景の数々が、最初は突発的に、あるいは散発的に、そして最後にはこれでもかというように連続的に姿を現わすのだ。

折よく、降りしきっていた雨も小降りになって、船室に閉じ込められていた観光客たちは気の早い者から屋上のデッキへと出ていった。

観光船がカーブするたびに次から次へと奇峰、奇景は現われ、観光客たち（もちろん僕も含めて）は写真を撮るのに忙しい。風景は山というよりも巨大な岩のようだった。木が生い茂り、緑に身を包んでいる岩もあれば、まばらな緑の間に石灰質の肌をさらしている岩もある。無数に連なり、あるいは折り重なってひしめく峰、あるいは超然と孤立する峰。鉛筆のように大きな峰の斜面に突き出した小さな峰。あるいは団子のような峰。そして厚い雨雲に煙る遠景。それはまさに山水画の世界でもあり、また僕には様々な表情を見せる五百羅漢のようにも見えたのだった。

興奮が一段落する頃に、地元の農民が果物を売りにやって来た。四本ほどの太い竹を並べた細長い筏を器用に操って、観光船に接近する。たぶん暗黙の了解があるのだろうけれども、その地点では観光船も速度を落して農民たちがひとしきり商売をすませるのを待っているようだった。商品はみかんやバナナ、すももなどの果物。一袋一元のすももを買った。しばらくして再び観光船は速度を上げる、小さな竹の筏を振り落とすよう

にして。

観光船の服務員が昼食の特別メニューの注文を取りに来た。漓江下りの料金には昼食は含まれているのだけれども、特別メニューとして漓江で捕れた魚と川エビの料理があるというのだ。魚は高かったので、川エビ（六〇元）の方を注文した。見栄というよりも、申し出は断られないという気の弱さのためなのだ。

ふと日本語の呼びかけに振り返ると、印鑑屋の青年だった。彼は中国なまりの日本語を操って、奇峰、奇景にまつわる物語を披露する。それぞれの岩にはその形や印象などから連想される物語があるのだ。ひとしきり話したあと、青年は印鑑をどうですかと誘う。屋上デッキに店を広げた印鑑屋は手彫りの実演を見せて、山水の風景にもそろそろ飽きてきた観光客たちの注意を集めていた。印鑑は材質にもよるのだが、一番安いもので三〇元だという。あいまいに返事をしているあいだに、昼食の声がかかった。

昼食はオーストラリア人の夫婦とドイツ人の男性との四人のテーブル。オーストラリア人の夫婦は特別メニューの魚を注文していて、僕は川エビ。ドイツ人の男は高い特別メニューなどあほらしいと思ったのか何も注文はしていなかった。それでも他国で袖を触れあった仲だから、みんな料理をつつきあった。

昼食後、到着の時間が迫ってきたからか、ひとつ二〇元に値下がりの印鑑を彫ってもらおう。

「オミヤゲですか？」

と声がかかって、振り返ると中国人の若い女性。女性のうしろにはしばらく前から気にかかっていた日本人らしい男性が立っていた。

福岡から来たという男性は西安をまわってきたと言う。中国人の女性とは福岡で知りあったらしい。

「新婦旅行？」

と尋ねると女性は笑いながら否定した。

漓江下りの終点、陽朔（ヤンシュオ）には午二時頃に到着した。

船着場の前の道にはお土産物の屋台が軒を並べていた。少数民族の民芸品や、Tシャツ、楽器など。道を歩いていると屋台からはしきりに誘いの声がかかる。別に欲しいものはなかったけれども、帰りの車（サンングラスの女性の乗用車）がなかなか来なかったので、四人ではぐれないようにしながらひやかしていった。

突然、耳元で「チーン」という金属片を打ち合わせる音がした。びっくりして振り向くと、ぼろぼろの服に身を包んだ地元の（おそらくは壮族の）

女性だった。足下を見ると、裸足に汚れたサンダル。彼女はなおも直径五センチほどのコインを器用に打ち鳴らして、

「チーン」

それから、

「ねっ、いい音でしょ。買って」

と言うように、言葉を発するのだった。彼女の言葉はほとんど理解することはできなかつたけれども、コインを売ろうとしていることとその値段だけは聞き取ることができた。

あまりにしつこいのでコインを手を取って見てみると『大日本帝国』、大正時代の「一元玉」なのだった。一枚五〇元と言う。

あまりにバカバカしいので、コインを突き返して、

「不要！」

と答えると、今度は別のコインを取り出してくる。なんとそれは『中華民國の一元玉』なのだった。しかも大きさも厚さも『大日本帝国』と寸分違わない。女性の身なりとその必死さには同情を感じたけれども、あまりと言えばあまりなのだ。

女性はオーストラリア人やドイツ人の方にも声をかけるのだけれども、彼らははなから相手にはしない。再び、僕の方に戻ってくるのだった。『中華民國』はともかく『大日本帝国』なのだ。何故一ドルではなくて、一元なのか。日本人観光客の方が売りつけやすいからなのだろうか。おそらくそれもあるだろう。日本人は西欧人のようにキツパリと拒絶したりすることはない。しかしおそらくそれだけではない。中国人たちは日本に対してある種のアンビバレンツな深層感情を持っている。ある種の血のつながりを感じている。それは長い歴史的時間にわたるつながりであり、「大日本帝国」という近代化の成功と「大日本帝国」による爆撃と侵略なのだ。『大日本帝国の一元玉』ははなから問題にならない偽物だけれども、一方ではそれは何事かの臭いを感じさせる。何事か僕とのつながりのあるものであり、何事かその貧しい女性と僕との関わりを体現するもののような臭いを感じさせるのだ。このコインに「大日本帝国」の凶柄を刻んだ中国人はどのような思いでこれを刻んだのだろうか、と僕はふと思う。

それでも五〇元というのはあまりの値段なので、やはり僕は無視して歩いていった。ときおり女性は

「チーン」

という音を鳴らしながら、どこまでもあきらめずについてくる。

最初、一枚五〇元だったコインは、二枚で五〇元になり、四枚で五〇元になった。僕はついに根負けして、

「一枚でいい。一枚だけだ」と言った。

女性は一枚なら三〇元と言ひ、それが二〇元になり、ついには一〇元になった。

今夜の飯代を稼ごうとするかのような女性の必死な様子に負けて『大日本帝国』を買った。

「はい終わり」と思ひながら、サヨナラしようとする時、何を考へているのか、女性はなおも二枚のコインを打ち合わせて、

「チーン」

二枚で一〇元と言ひながらついてくる。こんなものを何枚もはいらないので、今度は完全に無視した。しばらく無視していると、やがてあきらめたのか、いつのまにか彼女はいなくなつていた。

陽朔から桂林まではほぼ一直線の北上道路で、サングラスの女性は機嫌悪そうな表情で押し黙つたままぶつ飛ばすのだった。

視界を、漓江下りの余韻のように感じられる風景が流れていった。漓江下りの疲れが出たのか、オーストラリア人の夫婦もドイツ人の男性もやがて眠つてしまった。

車はやがて桂林市内に入り、陽朔から一時間半ほどで海外賓館到着。

「バイイ」と観光仲憫には言ひ、

「謝々」とサングラスの女性に声をかけた。

それまでまるで怒つてゐるかのように押し黙つたままだった女性が初めてニコツと笑つた。